

ACCELERATING TOWARD ELIMINATION

第48回国際結核・肺疾患予防連合(The UNION)肺の健康世界会議

2017年10月11日～14日,グアダハラ,メキシコ



結核予防会結核研究所

臨床・疫学部部长 大角 晃弘

今回の会議の主題は“ACCELERATING TOWARD ELIMINATION” (根絶に向けてさらに加速)で、2035年までに世界の結核根絶を目指すEnd TB Strategyをさらに推進するための方策について話し合うことを目的としていた。積極的な結核患者発見の推進、接触者健診の強化による結核患者と潜在性結核感染症者との早期発見と治療、結核菌遺伝子検査による多剤耐性結核患者の早期発見、9～12カ月の多剤耐性結核短期治療法の評価と推進、多剤耐性結核治療におけるベダキリンやデラマニド等新薬の導入、小児結核患者への適切なケア提供、喫煙対策の現状と課題、結核と非感染症(糖尿病、慢性腎疾患等)の現状と課題、WHOによる結核患者の費用調査の実施状況等、例年通り多岐にわたる分野の発表が行われていた。

バングラデシュでの試行から、世界中の多くの国々で導入されつつある多剤耐性結核短期治療法については、USAIDが経済的支援をしているSTREAM Clinical Trial (複数の国々における無作為抽出臨床試験)の中間報告があり(Stage 1)、WHOの多剤耐性結核標準治療法(18～24カ月間)と比較して、治療成績と副作用の発生頻度について、大きな相違がないことが報告されていた。サテライトシンポジウムでは、「紛争状況での結核患者ケア」と題して、シリア難民を受け入れている中東3国(ヨルダン、レバノン、トルコ)からの報告があった。シリアは年間の人口10万対結核患者届け出数が約20であり、結核高負担国ではないが、ヨルダンとレバノンでそれぞれ年間約100人、トルコでは年間約500人のシリア人結核患者が届け出されていた。ヨルダンからは、難民キャンプにおけるシリア人結核患者の治療成績が示され、90%以上の治療成功率であった。紛争状況下の厳しい中でも、良好な治療成績を達成できる例として印象的であった。また、今回の会議における発表で興味を引かれた内容の1つに、「結核とうつ」がある。結核発病がうつの発病リスクであり、その逆の可能性も推定されることが報告されていた。双方の

病理的な因果関係については今後の検討が必要であるが、結核と精神疾患との関連性について明らかになると、この分野における方策についてもより具体的に検討することになると考えられた。

結核予防会は、2016年のThe UNION肺の健康世界会議で、“What brought about a 10% decline in TB notification?”と題するワークショップを主催したが、今回はそれに引き続いて、“What we need to do for ending TB: adapting current progress to the framework of the End TB Strategy”と題するワークショップを主催した。発表は、日本・フィリピン・中国・韓国・台湾のアジア5カ国から行われ、日本からは“Universal Health Coverage (UHC) : social protection and other countermeasures against TB in Japan – what brought about a 10% annual decline in TB notification in Japan – ”と題して筆者が発表した。

次回のThe UNION肺の健康世界会議は、オランダのハーグで開催される予定である。2018年9月には、国連本部(於ニューヨーク)における世界結核対策に関するハイレベル会議が予定されており、The UNION肺の健康世界会議はその直後の開催となる。2030年までの世界結核根絶に向けた更なる研究・対策が進むこと、そのための必要な予算と人員とが確保されることを強く願うものである。☺



結核予防会主催ワークショップにて発表する筆者と司会を担当する加藤誠也結核研究所長及びボラー・フジワラ UNION Scientific Director(10月11日)